

モ ス ク ワ 滞 在 記 I

信州大理 勝 木 渥

§ 0. 前口上

昨年(1973年)の8月から10月にかけてぼくは2ヶ月間文部省の短期在外研究員としてモスクワ大学に滞在した。あとで分ったことだが、こういう形である程度の期間にわたってソ連の大学に滞在したというのはきわめて例外的なものであったらしい。政府間ないし大学相互間の科学者交換についてのしかるべき双務的協定に基くとか、先方の大学からの招待によるとか、共同プロジェクトの要員として派遣されるということでは、ソ連の大学に在外研究者として(短期訪問の旅行者としてではなく)滞在する道は普通にはないのであるらしい。

帰国後、体験談をしゃべり散らしていたらたまたま本誌編集部のO氏が同席していて、「それを“物性研究”に書け」という。物理そのものの論文が“物性研究”に少なくなくてきているときに旅行談などは……とためらっていたら、その後編集部からも書くようにとの手紙をいただいた。その気になって見渡してみると、ソ連で開かれた国際会議の出席者などからごく短期の訪問者としての見聞がいろいろな雑誌に報告されていることはあっても、1ヶ月以上ソ連の大学に滞在していたという物性屋の見聞記は見当らないようである。ぼく自身はモスクワにだけしか滞在せずかつ滞在期間の大部分をモスクワ大学物理学部の図書閲覧室でもっぱらCPAを磁歪の問題に適用する方法を考えてすごしていたので、ソ連の物性研究についての情報を広く入手しようというようなことはしなかった。しかし2ヶ月の滞在期間中こまごましたことでいくつか気付いたり発見したりしたことがあり、それはぼくのような滞在の仕方をしなかったら気付かぬことだったかも知れぬとも思うので、それらを紹介してみたい。

勝木 渥

§ 1. 観察雑記（国際会議、モスクワ大学）

ホテル代の話 § 4 に述べるようなモスクワ行きの経緯があったから、ぼくはホテルは国際会議の組織委員会には申込まず、旅行業者を通じて単なる個人旅行という形で予約した。ぼくのホテルは 1953 年に建てられたスターリン好みの尖塔をいただくレニングラードホテルで、19 階のバス・トイレ付きのやや時代ものの一室に 1 日 30 R（ルーブリ）で泊った。30 R の中には毎日 1 R の朝食券と期間中 1 回の 2 時間ほどのバスでのモスクワ市内観光が含まれていた。19 階のぼくの部屋は宿代と同様とても高く、コムソモール広場に面してヤロスラフ、レニングラード、カザンの 3 ターミナル駅を眼下にみおろす眺望絶佳なものではあった。他方、国際会議の組織委員会を通じて申込んだ人たちは 1 日 22 R でモダンなロシヤ・ホテルのバス・トイレ付の部屋が提供され、かつ 1 R の朝食券と 3 R いくらかの正餐券、会場までの往復バス、市内観光、2 つの小旅行等のサービスがその中には含まれていた。ぼくが社会主義国での物の値段がその物に含まれる中味と必ずしも一致しないということを発見した最初の場合がこれであった（のちに日本の 3 DK 程度のアパートの買取り値段が日本の大衆車程度の乗用車の値段より安い（!!）ということも発見した）。国際会議参加者には当り前のことのように思っていたようだが、ぼくにはこれはソ連の国際会議参加者に対する破格の出血サービスのように思れた。

9 月になってから高等教育省の管轄下にある大学ホテル（モスクワ大学から徒歩で 20 分程度の所にある）に移ったが、これはモダンな建物でバス・トイレ付の個室が素泊り 10 R であった。素泊り 3700 円というのはちょっと高いようにも思えるが、注意すべきは、これは外国人であるぼくに対する料金だということであって、ぼくはソ連人の宿泊料はもっと安いのではないかと推察している。なお、大学ホテルの玄関にはロシヤ語で「空室なし」という札が掛けてあった。このホテルがふつうのホテルとちがい高等教育省の管轄下にあることを思うと、ソ連人は一般には予約なしで普通のホテルに行って交渉して空室があれば泊るということもできるのではあるまいか。大学ホテルは高等教育省に属していて、普通のホテルとはちがうので、わざわざ「空室なしの札」を掛けていたのではあるまいか。

Kondorsky の研究室その他 観光写真中央に聳えるモスクワ大学中央館には、本部、

数学部、地質学部が入っており、中央館から両翼にのびているのは学生寄宿舍および職員宿舎である。Sedovはこの職員宿舎に住んでいる。中央館のエレベーターで行ける最上階は28階でそこは地質博物館になっている。ここからガラス窓越しに四方を見おろすことができる。24階にはバルコニーへの出口がある。バルコニーや地質博物館から“下界”の写真を撮っても構わない。モスクワ大学の中央館に入れさえすれば、博物館にゆくこともバルコニーに出てみることも、そしてそこから下界の写真を撮ることも自由である。モスクワ大学の建物の中に入るにはパスが良い。出入口には赤い腕章をまいた守衛（老人ないしおばさん）がいて椅子に坐ってパスをチェックしている。必ずしも、いつも几帳面にチェックしているわけではない。見なれない奴だと思われたり、視線があったりするとパスを見せろと言われる。

物理学部は32講座から成る大世帯で、中央館の裏手（南側）のロモノソフの像のある庭園をはさんで、ちょうど対面の位置に東に物理学部、西に化学部の5階建のビルが建っている。この両学部の建物は観光写真でみられる通りのモスクワ大学のスタイルをしている。物理、化学キャンパスの東側にできている哲学・経済学部の建物はモダンであり、また西側にある植物・土壌学部の建物もモスクワ大学風ではない。

磁気講座を主宰する E. I. Kondorsky は65才（当時）、E. I. はエフゲーニ・イヴァノウィチの頭字である。1937年にこの地位についた。前任者は Akulov で1928～35にその地位にあった。この講座の teaching staff は7人、それを含めて27人の研究補助者など26人がいて総勢53人の大世帯である。もっとも、この講座に所属する理論家 Vedyayev によれば、このうちタイピストはたった1人で、その人が講座内研究者の全論文のタイプをうつ、それでタイプにかなりの時間がかかるそうである（かれはそう言って肩をすくめた）。実験の研究室であるせいか、ぼくの訪ねたスタッフの部屋部屋は実験装置・器具が広く陣取り研究者はその片隅に自分の机をおいていた。ある実験室に同居している理論家 Vedyayev の机も例外ではなかった。Teaching staff はそれぞれに指導学生（院生？）をもって研究指導をやっているようであった。

Kondorsky はインバー問題については、Kondorsky のモデルをCPA的取扱いで発展させようということを考えていた（JETP Letters 18 191 参照）。西欧諸国との科学者交換も政府間協定に基くものが進んでいるようで、10月からはスエーデンの大

勝木 渥

学教授（大学名失念）で photo emission の実験家 P.O.Nielsson という人が1年間の予定で Kondorsky の研究室に滞在することになっていた。のちに親しくなったアナトーリイの物理学部の学生数を聞いてみたら2000人くらいだという。一桁間違っていないかと思って、物理の学生数だと念をおしたらそうだという。「一学年450人で5年生までいる。学年の学生数はt関数で、途中でいなくなる学生がいて、上の学年ほど数がへるから、まあ2000人という所だろう」ぼくは学会のとき化学部の大講義室の座席数を数えてみたことがあって、それがざっと300人程度の収容能力だと思った覚えがあって「ソレデハ講義室ニ入りキレヌデハナイカ」「学生をふたつのグループに分けて講義をしているのである」そばにいたボリスが横から口を出して「中央大講義室は600人を上回る収容力があり……」「ソレハ物理学部ノ講義室カ?」「そうだ、原理的には収容可能である。しかし一学年全部まとめて講義するのは教育上よくないので、2つに分けているのである」ぼくがこの2日ほど前に夜8時すぎまで図書室にいて帰るとき、図書室のロッカー・ルーム（ちゃんと番人がいる）にはまだ沢山学生のカバンが残っており、玄関下のクローク・ルームにも外套や帽子が沢山残っていたことを思い出して、そのことをいうと、ボリスは「朝9時から夜22時頃まで仕事（勉強）をするのはむしろありふれたことだ」とこたえた。ぼくは、ぼくが学生の頃から、社会主義国のコムソモールなどの活動家に会うことがあったら是非してみたいと思っていた質問をアナトーリイとボリスにしてみた。『コムソモールなどの指導的地位につくと物理の勉強をする時間がなくなるだろう。そういう地位についた物理の学生は物理の勉強はどうしているか』という質問である。こたえは、「勿論物理の勉強はできない。しかし、かれらが物理をやりたければ、たとえば1年後に指導的地位を交代して物理にもどる」「ソ連においては、よい学生とは、物理の学生であっても、社会的問題に関心をもちそれに携わる学生である。よいコムソモールはよい学生である。物理の学生でもマルクス・レーニン主義を学ぶのである」云々というようなものであった。

物理の大講義室の正面には赤地に白抜きでマルクスの資本論の序言のことば「学問に平安の大道はない。険阻な山道を辿るのに疲れることをいとわぬ人のみが、ひとりその輝ける絶頂に立ちうるのである」が大きくかかげられている。

物理の図書室 物理学部の図書室は4階と5階の中央部にたっぷりスペースをとって

作られている。5階には広々とした学生閲覧室、目録室、開架図書室、国内雑誌室をかねたスタッフ用閲覧室、その隣りに外国雑誌室、館内閲覧業務室があり、また図書室への入口にはロッカー・ルーム（といってもロッカーでなくて靴をおくための棚があって番人がいる）があって、図書室へ入る前にここに荷物を預ける。4階には書庫と館外貸出業務室がある。物理の図書室の長は気品ある老婦人であった。開館時間は土曜日をも含めて平日は8:30から21:45まで、日曜は10:00から17:45までである。図書館職員は交代でおそ番勤務についているようであった。モスクワの公共の建物はクローク・ルームが必ずあって、中に入る時外套、帽子、場合によっては手荷物も必ず預けるようになっており、モスクワ大学もその例外ではなかったから、図書室が日曜あるいは夜10時近くまで開いているということは、玄関のところのクローク・ルームの勤務者最低1人、図書室前のロッカー・ルームの勤務者最低1人が、図書館職員の他にその時間まで働いているということである。実験室の自分の机では店を抜けて仕事をするには狭すぎるということがあるせいか（理論の研究室のことは知らない）、図書室で勉強するという風潮は日本よりあるように感じた（日本でのぼくが、雑誌やコピーを自分の部屋にもちこんでそこで読む、図書館を勉強部屋としては利用しないというくせをもっているために、こう感じたのかも知れない）。スタッフ用の閲覧室には約50の席があり、よく図書館でみかけるような前立のついた個人机が配置されていたが、午前9時にはほぼ満席になっていた。ぼくの経験では9時頃までに出て来たときには大体空き席をみつけることができたが、9時半近くに出て来たときは席は全部ふさがっており、そういう時は閲覧室の隣りにある外国雑誌室のテーブルを利用した。週の半ば頃の日には此处もかなりこみあい、雑誌とノートを横に並べておくと隣の人の領分をおかすので、ノートを手前に雑誌を向かうにという工合において勉強した。もっとも閲覧室の占有された机のすべてに人がいるという場合はまれで、2割くらいは雑誌やノートがおいてあるだけであった。「机を占有したまま1時間以上席を外してはならない」という貼紙が壁にあったけれども、これは必ずしも守られていなかったようである。ぼくも昼食や夕食をとりに出たときには、確実にこの禁を犯した。

スタッフ用閲覧室で勉強している人のほぼ半数（ちゃんと数えたわけではないが）は婦人であった。ぼくらよりずっと年輩の、白髪をまじえた老婦人が何冊もの雑誌をつみ

勝木 渥

上げ、要所要所のメモをとりながら調べものをしている姿は、一種厳肅な気品を感じさせた。1917年に革命があってから56年が経つ。これら老婦人も革命後に育った人たちなのだ。ソ連の社会主義についていろいろのことがいわれているが、社会主義が婦人の潜在的可能性を現実のものにしたこと、婦人の前に多様な可能な道を開いたということとは否定できないと思った。もっとも、それでも家事の責任は伝統的にまだ婦人の肩に相対的には重くかかっているようで、物理学部のビュッフェで食事のついでに食料品もかいこんでいるのは大抵女性で、男はほとんどがただその時の食事をとるだけであった。

外国雑誌室には、最近5ケ年間ほどの外国雑誌が開架で排架されているのであるが、面白いことに、これらはほとんどがリプリント本であった。Phys. Rev. の部厚い号などは2冊分になっていた。わが物理学会のJournalも、京都のProgressもちゃんとリプリント本になって並んでいた。リプリント本は単色刷りなので色つき表紙や色刷り図版の雑誌もみな単色になっていた。だからといって原本が物理の図書室に全くないというわけではない。外国雑誌室に排架されているはずの号が見当らなかったとき、館内借出しの手続をしたら原本を貸出してくれた。リプリント本を作っているのは多分外貨節約の国策によるのであろう。

開架図書室には単行本がずらりと並んでいたが、それらはすべてロシヤ語であった。図書は分野別に分類排架され、同一分野では著者のロシヤ語アルファベット順に排列されている。需要の多いと思われる本は同じ本が数部おいてある。お国ぶりがうかがえて面白かったのは、いわば第0番に相当する書架数個(1個は高さ約2 m, 巾約1 m)がマルクス主義関係の本にあがられていたことである。まず、第1番目の書架がロシヤ語のマルクス・エンゲルス全集、第2と第3の書架がレーニン全集(これは各巻10冊くらいずつおいてある)、第4の書架がマルクス・レーニン主義哲学(弁証法的唯物論、史的唯物論)、マルクス主義政治経済学、社会主義の政治経済、第5の書架がソ連共産党史関係の図書にあてられていた。アナトーリイとボリスが話してくれた所によれば、物理学部でも正課として、ソ連共産党史、哲学(弁証法および史的唯物論)、政治経済学、科学的共産主義について学ぶということであった(アナトーリイが「弁証法はヘーゲル以降を、史的唯物論は……」といいかけたのをぼくが一瞬唯物論の歴史と勘ちがいして話をひきとり、「……ギリシャ哲学カラヤルノカ」ときいたら、アナトーリイはけ

げんな顔をし、「否、否、史的唯物論はマルクスに始まる」「アッ、ソウカ。唯物論ノ歴史デハナクテ……」「そう。史的唯物論である」)。第6番目の書架から、数学、理論物理学……と分類別に専門書が並び始めるのである。ぼくがポピュラーな単行本として思いうかべることのできる本は、大抵ロシヤ語に訳されて並んでいた。Kubo編の裳華房の大学演習“統計力学”に相当する本も英語版から露訳されて並んでいたし、また例えばH. Jonesの“The Theory of Brillouin Zones…”も露訳されて並んでいた。物理をやるのに、ロシヤ語さえ知っていれば基本的には不便しないような工合になっているように見受けられた。

ソ連版論文選集 日本¹の論文選集に相当するものは、日本ほど数多くではないが、ソ連でも出版されている。日本とのちがいは、採録論文がすべて露訳されているという点にある。1963年にVossovskyの編集で“金属・合金の強磁性の理論”という論文選集がモスクワの外国文献出版所から発行されている。これはかなり読まれているらしく、そこに日本人の論文としてはShimizuの1960年の2編の論文が露訳・採録されているせいか、ぼくが日本から来たという、ほとんどの人が、ではShimizuを知っているか、とぼくに聞いた。この論文選集に採録された論文リストは付録としてこの報告の末尾に添えておく。ソ連でその当時どういう仕事²が評価されたかの参考資料になるであろう。論文が露訳された日本人はShimizuだけかと思ったら必ずしもそうではなく、1956年には同じ出版所からVonsovsky監修、Shubin訳で論文選集“反強磁性”が出版されており、そこには、Nagamiya, Yosida, Shimizu, Yamashita, Kubo, Tsuya - Ishikawaの諸論文が露訳・採録されていた。

1971年には、Vonsovskyの、磁性に関する百科全書的大教科書“磁性—反磁性体、常磁性体、強磁性体、反強磁性体、フェリ磁性体の磁氣的性質”が発行されている。これは文献7000以上を網羅した1000頁を超す大著で、磁性に関する話はほとんど何でも書いてある(ようにパラパラとめくってみた限りでは感じる)。この本は物理の図書室に7~8冊整えられていた。モスクワ大学中央館の広場にある本の小店(この広場には雑誌、本、分房具等の小店が店をひろげている。物理学部の一階ロビーの一隅にも本の小店がある)でも国際会議のときにこの本が売られた。ただし8月25日に売切れてしまった。実は、ぼくはモスクワに来て買うつもり³の本の一つとしてこの本を予定して

勝木 渥

いたのだが、多少気持ちにゆとりができて来て、休憩時間に本を物色したりしはじめたのが8月26日だった。本屋のおばさんに「ボンソフスキーのマグネティズムはあるか」と聞いてみたら「昨日売りきれてしまった」という答だった。街でクニージュヌイ・ミール（本の世界）という建物をみかけたことを思い出して「どこか他の本屋。たとえばクニージュヌイ・ミールへ行ったらあるだろうか?」「いや、どこにもないだろう。この国際会議のためにここに5冊配給があったのだから。そして昨日みんな売れてしまった。」この話を Vedyayev にして残念がったら「よし、おれが探してやる。あさって会う時もってきてやる」と言った。そして、かれの本（多分）をぼくにプレゼントしてくれた。ソ連の本としてはかなり高価で6.73 R、約2500 円の本である（ちなみにぼくが同じ店で買ったランダウ・リフシツシの理論物理学小教程第1巻「力学・電気力学」（1969年）は270頁で54 K（カペイク 100 K = 1 R）、第2巻「量子力学」（1972年）は370頁で79 Kであった）。

このように大きな百科全書的な本を作ったのは、ぼくの想像では、63年の論文選集以後の磁性理論の展開が多岐にわたっていて論文選集方式では膨大になりすぎて拾収がつかなくなるためではないかと思う。ぼくは以前からずっと気になっていたことが一つあったので、それがこの本でどうなっているかをしらべてみた。それは Nagamiya - Yosida - Kubo の反強磁性についての総合報告 (Adv. Phys. 4 (1955) 1) が本文中 (12 頁) では「著者たちの見出しえた限りでは、反強磁性体に特有な磁化率の最初の測定は日本で Honda とその協同者たちによってなされた」「かれらは MnO , Cr_2O_3 , CuBr_2 , CuO および NiO を液体空気から 1000°C の間で研究した」と指摘しながら、おそらく文献整理段階におけるミスのために最も歴史的なというべき Honda-Soné の 1914 年の Mn-化合物に関する論文（ネール点での磁化率異常を観察・記録した歴史的に最初のもの。この年 Honda-Soné は 2 つの論文を発表しており、あとの方のものが Fe_2 および Cr^{2+} 化合物についてのものであったが、このあとのものだけが文献リストに採録された）を文献リストから脱かし、また反強磁性物質データー一覧表からも MnO の欄にあってしかるべきこの文献とそのデーターを落していた（この歴史的文献は K. Honda und T. Soné : Sci. Rep. Tóhoku Imp. Univ. 3 (1914) 139-152 である）。Vonsovsky の本でこの脱落が補われているか、それともやはり脱落したま

までであるかということが気になったのであるが、この本の703頁にのせられた反強磁性体の一覧表(表22.1)のMnOの項および関係論文リスト(pp 763-773)から上記論文は脱落したままであった(同年のFeおよびCr⁺化合物の方の論文は文献番号136として採録されていたが)。Nagamiya-Yosida-Kuboの総合報告がすぐれた権威あるものであるだけに、またVonsovskyのこの本が1970年頃までの磁性研究の集大成とってよいかも知れぬほどのものであるだけに、そこから脱落した上記論文の存在が忘れられてしまわぬことをぼくは望む。

国際語としてのロシア語 国際会議出席者が帰国後いろいろな雑誌に書いているものをみると、ソ連からの参加者がもっぱらロシア語で講演したことに対する評価はきわめて悪いようである。たしかにわれわれ資本主義体制の中に住むものにとってロシア語は英語ほどには親しみ深くない。また、日本やインドなどを含めてアメリカと西欧資本主義諸国が一つの学問的な国際社会を作っていることも事実である。しかし、われわれはこのことを余りにも当たり前だと感じきっているために、われわれの世界のほかにももっと別の世界があって、そこでは人々はロシア語を主たる言語として物理をやっているという事実にはほとんど気付いていないのではあるまいか。ここでぼくは社会主義体制、社会主義圏のことを言おうとしているのではない。ソ連自体が一つの国際社会(正確には多民族社会というべきだろうが)であり、ロシア語はそこにおける国際語だということを言いたいのである。国際会議に出席した注意深い人は、ソ連の紙幣に、たとえば1R紙幣ならロシア語で大きく一ルーブリを書いた下へたしか2列にわかれて7行ずつ計14個の言語で一ルーブリと書いてあることに気付いたであろう。その中にはわれわれに見慣れたローマ字風の文字もあったし、ロシア文字風の文字もあったし、中央アジア風とでもいうかインド文字ないしアラビア文字を思わせる文字もあった。ソ連自身が一つの国際社会であり15の共和国から構成されている。ロシア語はソ連邦を構成する15共和国中の1つであるロシア連邦共和国の中心たるロシアの国語なのであって、ソ連人全体にとってロシア語が母国語なのでは決してない。ソ連という一つの国際社会にとってロシア語は国際語なのである。

8月31日のひるすぎ、ぼくはロモノソフ像のかたわらのベンチでアジア風の容貌をした女子学生と話合う機会があった。ヴェトナム人かも知れない、それにしては北方系

勝木 渥

の感じだがあるいは蒙古人かと思いながら話しかけてみた。かの女は英語は全然知らない、ドイツ語なら学校で習ったという。ぼくはドイツ語は全然忘れてしまった。結局かの女の本式のロシア語とぼくの片言のロシア語とで、ぼくの常に携行していたロシア語辞書を時には使いながら会話し、ぼくがかの女について知りえたことはおおよそ次のようなことであった。かの女はロシア連邦共和国に属するトゥヴィーン自治州の出身である。この9月からモスクワ大学の物理学部に入学することになった（9月1日から新学期が始まる）。3日間汽車にゆられて（それから多分飛行機に乗継いだといったのだと思うが、それはよく分らなかった）モスクワに着いた。辞書にのっていたソ連の地図をみたら、トゥヴィーン自治州はバイカル湖のやや西、蒙古との国境に近い所にあった。おそらくそれは辺境の地といってもよい所であろう。もし十月革命がなかったら、かの女は遊牧の民の一員であったかも知れない。一族の男たちにかしづく生活かも知れない。しかし、今かの女はモスクワへ物理を学ぶべくやってきている。辺境ともいえるべき地に生まれた一人の若い女性の前に、一つの現実的に可能な進路として物理学への道が開かれているという事実にはぼくは感動に似たものを覚えた。

大学の食堂で出合った Tamayev という物理の大学院学生は、日本の農村などでみかけてもおかしくないような風貌であった。アジアのどこかの国から来たのかと思って聞いてみたら、かれはグルジャ人であった。ぼくが日本人だと知ると Shimizu を知っているかときき、また自分も似たことをやっているのだといって Watanabe と Shinohara のことを聞いた。かれはぼくに対する友情をあらわに示し、おれたちは固く固く連帯しようといって、自分の両手を顔の前で握手するような形に組合わせて前後にふるのであった。

かれにとっても、またさきにのべた女子学生にとっても、ロシア語は決して母国語ではなくて外国語なのである。そしてそれはわれらにとって、一つの国際的言語としての外国語なのである。多くの日本人はこの事を知らず、あるいは知っていても身にしみては感じず、ロシア語をソ連の母国語・民族語と解する向きがあったのではなかろうか（ソビエト人の発表がソビエト語でなされたと書いていたレポートを見た記憶がある）そして国際語としてのロシア語の使用をソ連のエゴイズムないし民族主義、あるいは国際会議の国際性に対するソ連の無理解という工合にのみ受取っているのではなかろうか。

本多と Akulov ふとしたことから本多と本多スクールの歴史に興味をもつようになった。ぼくは、本多光太郎が終生 Weiss 理論をうけいれなかったということもあって、Weiss 理論がどのような経過でフランス以外の国々にうけいれられるようになったかについて関心をもっている。大学への滞在の手続きをとり本部に連れていってもらったとき、その待時間のあい間に本多のことなどを話しながらソ連での Weiss 理論受容のプロセスについて Kondorsky に聞いてみた。Kondorsky は本多が戦後まで存命であったと聞いて驚いていた。Kondorsky の師 Akulov と本多とは頻繁に手紙のやりとりをしていたが 37 年頃から手紙が来なくなったので、自分 (Kondorsky) は本多はその頃亡くなったものと思っていた。「そうか、戦後まで存命であったのか」「ソウダ。亡クナッタノハ 1954 年デアル」「Akulov は磁性について Weiss とはちがった見解をもっており、その見解は本多に似ていた。そして Akulov は本多を尊敬していた。」ぼくが磁性の歴史に関心があるといったら、モスクワ大学の Dr. Miryasov が歴史のことを調べているとのことであった。Miryasov にできたら会ってみたいと思い、後日もう一度 Kondorsky に Miryasov のことをきいたら「彼は目下引退間近であり、病気で入院している。英語はできない。Vedyaev に Kondorsky からだといって会見の手筈をつけてもらい、会見の時は同席して通訳してもらったらよいだろう」と助言してくれた。Miryasov の問題意識はぼくのそれとはちがっているようだし、忙しそうな Vedyayev をわずらわすのも悪いし、今のままで会ってもあまり実りは期待されないし、と思って会うのはあきらめた。

第 2 次大戦と物理学部 物理学部の建物の玄関にむかって左側の壁にそって、一つの記念碑がある。そこには「1941 年から 1945 年にかけての偉大な祖国戦争の歳月の中でわれらの祖国の自由のための戦いに破れたモスクワ大学物理学部の学生、大学院学生、職員、教員に永えの栄光あれ」という言葉が刻まれており、その言葉の下に 121 人の学生、大学院学生、機械工、ガラス工、技術員、研究員、助教授、教育部主任、副学部長、物理学部党委員の名がアルファベット順に並んでいた。碑の前には花が供えられていた。また、滞在することになって数日のうちに気付いたのだが、ぼくは物理学部の建物の中でしばしば隻手の人、隻脚の人、隻眼の人等々をみかけた。そのような人が、ぼくが日本で通常みかけるよりもずっと多い割合でいるような気がした。それらはおおむ

勝木 渥

ね年配の人であった。アナトーリイにそのことを話して、第2次大戦の戦傷者かと尋ねたら、そうだとこたえた。モスクワ大学に滞在中、ぼくは何度かこの碑の前に佇み、ファシズム打倒のためにソ連人民の果たした役割とその犠牲の大きさを思いながら、そこに刻まれた121人の名を立ち去り難い思いで見つめた。

壁新聞 物理学部2階のホールには学部の壁新聞がある。これは廊下の壁面一ぱいを利用したものである。日本でよく見られるような直接紙に墨で大きい字で書いたものではなく、要所要所に写真や見出しや挿絵などを入れながら、タイプ用紙にタイプで打った記事をちゃんと編集して、たて1m、よこ4～5mくらいの大きな台紙に割付け配列したものであった。だから壁新聞は遠くから眺めるだけでなく、興味ある記事には身を近づけて読むべきものになっている。物理学部の壁新聞は学部当局、学部の共産党委員会、コムソモール（共産主義青年同盟）委員会、労働組合、学生自治会の共同編集になっていた。この壁新聞は月刊らしくて、9月末までは入学進級おめでとう号とでもいふべきものが貼ってあった。学部の偉い先生が何か教訓めいたもの（トボクが推察シタモノ）を写真入りで書いていたり、先に紹介した物理図書室の長の老婦人の写真入りの記事があったりした。また、この号には、地球物理学科の学生たちがその夏休みにクナシリ、エトロフ等のクリール諸島に地質調査に行ったその報告がのっていた（大学中央館28階の地質博物館にはサハリン島やクリール諸島の地質図やその付近の海図なども展示されていた）。日本ではクリール諸島について「未解決の北方領土」問題として、これらの島々に以前居住していた人々の素朴な郷愁に便乗しつつ、排外主義に容易に転化しうると思われる庶民的なナショナリズム・領土欲を煽りたてるような宣伝が行われており、左翼勢力の間でも国会での議席数の増大と不可分の関係をもってこのような風潮に迎合する傾向が見られるけれども、われわれももっとクールに事態をみなければならぬと思う。この壁新聞の記事などからうかがわれるように、すでにその地では四半世紀以上も、1945年までとは全くちがった人々の生活がいとなまれているという事実を見落してはならぬ。さらに、日ソ間の国境問題は単に日ソ間のそれにはとどまらず、より複雑な歴史的経緯をもつヨーロッパの国境問題に連鎖反応を起すかも知れないことも念頭におくべきであろう。第2次大戦後、第3次大戦の火種となりうるものがいくつかあったけれども、その一つにヨーロッパにおけるドイツ問題 — 国境問題があった。西独

ブランド政権の平和への功績はこの問題を現実的に処理した — 火種を火消し壺に入れたという点にあるのだ。かつてクリール諸島が日本の版図下にあったとき、それは辺境の地であり僻地であった。今、日本の国内の過疎地帯で人々が村を見棄て、村々が廃となってゆきつつあるときに、一方でクリール諸島の領土問題に固執しつづける日本の政治家の姿勢にぼくはきな臭いものを感じる……。壁新聞のこの記事をみながら、ぼくはこんなことを感じていた。

9月末に貼りかえられた壁新聞に、日本娘と思われる顔の（日本髪を結った）絵がかいてあり、また子供をおぶった日本婦人らしい写真をみかけた。おやっと思って近づいて見出しを読んでみたら「日本における10ヶ月」と題してこの学部（電波関係の研究者が東海大学に10ヶ月滞在して帰ってきた（モスクワ大学と東海大学との間に学者交換の協定が結ばれているらしい）その印象記を書いたものだった。銀座の夜景、丸の内の昼の景色、夜行の山行き列車をまって新宿駅で坐りこんでいる登山者の群、かれ自身の富士登山の記念写真とともに、タイプで打ったロシア語の記事がタイプ用紙5～6枚にわたって書かれていた。東海大学の松前学長が社会党の議員であったことを強調し、また日本の学生運動（反安保）についての紹介もしてあった。

物理学部の中の壁新聞は、この学部全体のものの他に各研究室ごとにもあるようで、

下を歩きながらちよくちよく小掲示板（小壁新聞）をみかけた。ある掲示板には一組の組写真が貼ってあって、畑でジャガイモを一ぱい入れたバケツを2人で運んでいた（「われらの土曜労働」というコメントがついていた）、一同が車座になってジャガイモを頬ばっていた（「働かない奴が食っている」とコメントしてあった）する写真であった。かれらの、畑での収穫労働であることはたしかだが、これがコルホーズに勤労奉仕に行った写真なのか、リレーションとしてのいもほりの写真なのか、その辺はよく分らなかった。楽しげな写真とコメントのいかにも楽しんでいるニュアンスがぼくに何となくレクレーションを思わせ、他方でまさか大学生がレクレーションにいもほりでもあるまいという気もするのである。

コムソモール独自の壁新聞も2階ホールの別の場所に貼ってあったが、そこには授業をさぼって映画にゆく学生を皮肉った漫画と記事ものっていた。

ぼくのモスクワ滞在中に起った国際的大事件として、チリのファシストによるアジェ

勝木 渥

ンデ人民政権転覆のクーデターと中東戦争がある。チリ問題がおこったとき、中央館一階広場中央部の壁には怒りをこめた壁新聞が貼り出された。それは、物理学部の行儀よく編集された壁新聞とはちがって、見出しや写真につけたコメントなどの筆勢・筆遣いからほとぼしる怒りが感ぜられるようなスタイルであった。ファシストのクーデターと影で糸をひくアメリカ帝国主義を強く攻撃していた。壁新聞の前には人々が群れて熱心に読んでいた。9月20日頃に見た壁新聞にはアジェンデの最後の日のたたかいの模様が「9月11日、火曜日、7月40分……」という書き出しに始まり、ほとんど20分か30分おきに事態の進行の様子がタイプ用紙数枚にタイプされ「14時15分、……（おそらくアジェンデの死）」で終わっていた。ロシア語でタイプされていたので詳しい中味は分らなかった（日本へ帰れば日本の新聞に報道されているだろうと期待したが、帰国後読んだ親聞には自殺説は報道されていたが、アジェンデのこの最後のたたかいの有様は報道されていなかった）。チリ共産党書記長コルバランがKhunta（ソ連ではチリのファシストをスペインの政治結社（岩波ロシア語辞書による）になぞらえて、フンタと呼んでいた）につかまった時の壁新聞も怒りにみちたものであった。アジェンデとコルバランの大うつしの顔写真が黒枠で囲ってあり、コルバランを救え！という檄が大きく書いてあった（ぼくは、これをコルバランの眠りと読みちがえ、ボリスにたしかめるまでコルバランが殺されたのかと思っていた。）ゲバラの言葉、ネルーダの詩、ヘミングウェイの詩の抜粋なども書かれていた。ヴィクトール・ハラを悼んだ文もあった。虐殺現場の写真に「われらのデモクラ CIA」というコメントがつけられあつたりした。これらチリ関係の壁新聞の総見出しは「チリ — 地球の痛み」というものであった。（その他、エフトシェンコはプラウダにコルバランに捧げる詩をかいていた。また、たまたまチリを旅行中だった日本人学生がクーデターに出くわし、旅券をみせたのにつかまって収容所に何日かぶちこまれた記事（たしか共同通信）もプラウダに出ていた（この30行ほどの記事をぼくは物理の図書室で辞書をひきひき時間をかけてよんだ。帰国後よんだ日本の新聞ではこれに相当する記事は見かけなかった）。テレビでもチリ特集の番組をくんでいた。新聞の国際欄は、ぼくの滞在中ずっとチリ関係のニュース — チリでのできごとおよびそれへの世界中での抗議行動を報道しつづけていた。）中東戦争についても、ソ連の新聞は中東戦争開始直前のイスラエルの準備行動 — 予備役軍人の

召集等々を指摘しつつ、イスラエルによって準備・挑発されたものという立場をつらぬいていた。壁新聞はイスラエル軍の攻撃で殺され傷つけられた難民の写真を大きく掲げ、イスラエル軍の蛮行を攻撃していた。

中央館と学生寄宿舍をつなぐ廊下には掲示板があって、寮生相互間のものと思われるいろいろな伝達事項が貼ってある。モスクワ大学にはソ連以外の国々からもたくさんの学生が留学していて、国際色非常にゆたかである（ぼくは、モスクワ大学東洋語学部の日本語科3年生のヴェトナム人男子学生から「アナタワ日本人デスカ、ワタシハヴェトナム人デス」と日本語で話しかけられたことがある）。だから、この掲示板に貼ってあった連絡もアラビア語（文字から推察）あり、フランス語あり、スペイン語（推察）あり、中央アジア風の文字でかかれたものあり、ドイツ語ありという風でまことに多彩であった。英語でかかれたものもあったが、それはインド人学生協会の「今度インドソ連間の協定の中味が前進して、留学インド学生数がふえる云々」との旨の連絡文であった。

亡くなった人 物理学部の玄関を入ったところホールには、太さ7～80 cmくらいの太い四角い柱が数本ホールを貫いて立っている。これらの柱もまた掲示板の役割をしている。ある日、この柱の一面が赤い布でおおわれて、そこに黒枠で囲まれた若い女の人の写真がかかげられていた。写真のすぐ下に名と父称と姓がかかれており、生年月日と亡くなった日（それがその日であった。亡くなった人は30才だった）がそれにつづき、さらに物理学部のある講座の事務員であったこの人が重い病気ののちに今日亡くなったと書いてあり、その人の仕事と学部への貢献について紹介したたえてあった。柱の前には床に赤い布でおおった台がおかれ（木製の長椅子を赤い布でおおったものとぼくには見えた）、鉢植の数個の花がおかれていた。翌日みたときには三角フラスコに挿した可憐な花もいくつか供えられていた。ぼくは、赤が、死を悼む気持ちをあらわす色としてそれなりの荘重な深みのある雰囲気を作りうる色であることを知った。

青年組織 物理学部2階に軽食堂があることを、そこで食事をした国際会議参加者は覚えているであろう。その斜めむかいにコムソモールの物理学部の書記局があるのにある日気付いた。そのことをアナトーリイとボリスに言って、ソ連の学生の生活や社会活動のことを直接ソ連の学生からきいてみたいのだ、コムソモールの書記局を訪ねてみて

勝木 渥

もよいだろうかとたずねてみたら、よし、ではおれたちが都合をきいてみてやろうといって、2、3日後にOKの返事をもってきてくれた。それで2度ほどその書記局をたずねていろいろきいてみた。

ソ連では新学年は9月から始まるが入学年令は満7才であり、10年間学校(Shkola)に在学する。そのあとで大学に進む。大学には単科大学(Institut)と総合大学(Universitet)がある。モスクワ大学物理学部の入試科目は数学2、物理1、ロシア語2の計5科目である。ロシア語2科目というのはイズロジェーニェとサチニェーニェで、この区別はコムソモール書記の説明をきいただけではよく分らなかった。多分、作文と論文とでもいった意味あいをもっているのであろう。「入試は難かしいか」と尋ねたら書記は顔をしかめて「非常に難かしい」とこたえた(かれは既婚の大学院学生(男)である。大学入学以前にどの程度の基礎知識をもっているのかと思い、微積分は大学へ入ってからやるのかと聞いてみたら、微積分の初歩は学校でやってくる、とのことであった。モスクワ大学物理学部の定員は1学年あたり500人(ここらの数字、前出のアナトーリィの話と若干くいちがうがこちらの方が正しかろう)、在学年限5年半でこの最後の半年は卒業論文の仕事のための期間である。大学院は3年間で定員は1学年あたり60人である。在籍女子学生数の比率は現在約25%とのことであった。外国人学生は2つのグループを別につくって教育がなされているとのことだった(ボリスによれば天文の講座に4年生か5年生の日本人学生が1人いるそうである)。

コムソモールへの物理学部学生の組織率は約94%だそうである。各学年に450人を上まわるコムソモール員がいることになる。一階ホールの掲示板には各学年ごとのコムソモールの行事や学習・研究会の予定表などがたくさん貼り出してあった。もちろん、コムソモールとは別に日本の学生自治会に相当するStudent Councilもある。平和運動や社会活動でソ連の学生はどんな活動をやっているかときいてみたら、コムソモールに入っているいろんなことをやっているから、どんなことをと聞かれても一つ一つは答えられない、いろんなことをやっている、という答がかえってきた(中央館のチリ問題の壁新聞のそばの太い柱には、コムソモール員はソ連平和委員会へ行って仕事を手伝えというコムソモール委員会からの伝達や、コムソモールとしての行動スケジュールなどが貼ってあったのをぼくは見ている)。その頃新聞に「今や収獲が共産主義への最前線だ」

とか「5ヶ年計画の千日目」とかの見出しで収獲が順調に進んでいるという記事があったことや、すでにのべたジャガイモほりの壁新聞写真のことを思い出しながら、処女地の開拓などに参加したりするのかを聞いてみようと思ったが「処女地」という言葉が出て来ない。そこで一計を案じて、「ショーロホフに“静かなドン”と もう一つ有名な長編小説があるだろう。あれは何という題だっけ？」相手に“開かれた処女地”といわせて処女地の開拓に話題をもっていこうとしたのだが、相手はぼくが急に話題を文学に転じたかと思ったようで、話は全く混線してしまった。そこで話題を転じてかえってアナトーリイとボリスにきいた話題「コムソモール活動家は物理を勉強する時間があるか」をたずねてみた。たまたまそこにピチピチした女子学生が入ってきた。かの女は英語のよくできる女子学生だったので、書記がぼくとの応待を代ってやってくれと頼んだ。ぼくの質問に対して、かの女はきっぱりと「われわれの所には時間がある」とこたえた。ぼくは決して反ソ宣伝の材料にしようなどというつもりはなく真面目な質問だということを分らせようと思って「日本では社会的活動に活発な学生は、物理を勉強する時間の足りぬことに悩んでいるのであるが……」「われわれの所には充分時間がある」「20年以上も前、われわれは学生るとき、朝鮮戦争のさなかに反戦運動をやった。そのときも同じ悩みをいだいたものであるが……」「われわれの所には充分時間がある。われわれの書記は学生ではなく大学院学生だがちゃんと物理もやっている。あなたはもっと concrete な質問をすべきである」、ぼくの質問に対する答をひき出しえなかったことは残念であったけれども、ぼくの質問に断固として「われわれの所には充分時間がある」と一貫して答えつづけたかの女に、ぼくは何かほほえましくなるような好感をおぼえた。

あと少し、学生生活についてきいてみた。授業料がただであること、寄宿舍が完備していること(ただし全寮制ではないようである)、全学生に奨学金が支給されていること等は日本でもかなりよく知られてある。あとでぼくは気付いたのだが、学生には、どうも金券のようなものが給付されているようであった。日本の名刺くらいの大きさでやや厚手の上質わら半紙ていどの紙質の紙を何枚かとり出して、物理の軽食堂で食事代を支払っている場面をぼくは何度かみた。その金券は大学の外でも通用するようで、大学ホテルの近所の食料品店で、学生がその金券(とおぼしきもの)で支払いをしているのを見た。

勝木 渥

JASON 問題

アナトーリイとボリスに JASON 科学者の話をした。かれらはあまりこのことを知らなかったようである。ぼくは西欧でこれに関連して起ったいくつかの出来事を紹介し、また日本でも日本で開かれる国際会議への招待予定者の中に JASON 機関のメンバーが入っていて、それへの招待をどうするかが大きな問題になっているという話をした。ボリスが「ある科学者が JASON 機関のメンバーであるか否かがどうして分るのか」ときいた。「アメリカの反戦活動家が機密文書を入手し、それを公表した。今やそのリストは広く知られている」。アナトーリイが「それはぜひ知りたいものだ。ソ連でも、今度われわれの研究室にスエーデンからニールセンが来たように、外国からかなり人を呼べるようになった。もし Kondorsky が知らずに JASON のメンバーを呼ぶような計画をたてるようなことがあったら、おれはそれに反対せねばならぬ」といった。ぼくは帰国したらすぐ英文の JASON の関係の資料を送ると約束した（ぼくは帰国後約束を果たした）。

(続)

付 録 Vonsovsky 編 論文選集 “金属・合金の強磁性の理論” (1963 年モスクワ)

採録論文リスト

第1部 強磁性金属の理論

1. C.Herring : J. appl. Phys. Suppl. 31 (1960) 3S
2. W.Lomer and W.Marshall : Phil. Mag. 3 (1958) 185
3. E.O.Wollan : Phys. Rev. 117 (1960) 387
4. J.B.Goodenough : Phys. Rev. 120 (1960) 67
5. J.B.Goodenough, A.Wold, R.J.Arrott and N.Menyuk : Phys. Rev. 124 (1961) 373
6. R.Stuart and W.Marshall : Phys. Rev. 120 (1960) 353
7. R.K.Nesbet : Phys. Rev. 122 (1961) 1497
8. A.J.Freeman and R.E.Watson : Phys. Rev. 124 (1961) 1439
9. A.J.Freeman, R.K.Nesbet and R.E.Watson : Phys. Rev. 125

(1962) 1978

10. J. Friedel, G. Leman and S. Olszewski : J. appl. Phys. Suppl. 32
(1961) 325S
11. M. Shimizu : J. Phys. Soc. Japan 15 (1960) 376
12. M. Shimizu : J. Phys. Soc. Japan 15 (1960) 1127

第2部 強磁性合金の理論

13. W. Lomer : Brit. J. appl. Rhys. 12 (1961) 535
14. J. Friedel : J. Phys. Rad. 19 (1958) 573
15. P. W. Anderson : Phys. Rev. 124 (1961) 41
16. P. A. Wolff : Phys. Rev. 124 (1961) 1030
17. A. M. Clogston : Phys. Rev. 125 (1962) 439
18. A. M. Clogston, B. Matthias, M. Peter, H. Williams, E. Corenzwit
and R. Sherwood : Phys. Rev. 125 (1962) 541

第3部 強磁性金属中での核への有効内部磁場

19. R. E. Watson and A. J. Freeman : Phys. Rev. 123 (1961) 2027